

2009年浅川ゼミ会症例発表会抄録(浅川要)

## 主要テーマ「任督脈についての一考察」

**I、望診の顔面診において、腎を示す場所はなぜ、顔面の何箇所にも存在するのか？また人中溝はなぜ、「胞宮・膀胱」を示すのか？**

①『靈枢』五色篇の「黄帝曰く、庭は首面なり、闕(眉間)上は咽喉なり、闕中は肺なり、下極(両目の間)は心なり、直下者肝也、肝左者胆也、下(肝の下)は脾なり、方上(鼻翼)は胃なり、中央(頬の中央)は大腸なり、大腸を挟むは腎なり、・・・」や「雷公曰く、五官の辨(わか)つは奈何(いかん)。黄帝曰く、明堂(鼻)の骨高く以て起こり、平らかにして以て直く(端正で真っ直ぐ)、五臓中央に次し(順次並ぶ)、六腑 其の両側を挟む、・・・」に基づく「面鍼」や「鼻鍼」の五臓のうち、肺心肝脾の位置は鼻の正中にあるが、腎については位置が異なる。それを臨床に用いた「面針」では腎の位置はさらに具体的に「頬部にあり、鼻翼の水平線と太陽穴から下ろした垂線の交点」としており、「鼻針」の腎の位置は「鼻の先端」(どちらも上海中医学院編『針灸学』より引用)である。また頤を腎とする説もある。腎だけがなぜ、顔面部の方々に分かれてしまうのか？

それを解く鍵は任脈と督脈の流注にあるのではないだろうか？

任脈と督脈の巡行経路については『黄帝内経』と『難経』とで食い違い、また現代中医学と日本の鍼灸学校教科書でも異なるが、顔面診からみると、『黄帝内経』にもとづくべきであると考えられる。

②人中溝は「面針」では「胞宮・膀胱」を表し、「鼻針」は「前陰」を表すとする。しかし、『靈枢』経脈篇の「脾絶」の証では「人中満則唇反」と脾とも関連づけている。個人的には「胞宮・膀胱」の状況を示すと考える。なぜ、人中溝が「胞宮」を表すのかは、鬲交穴のところが、「任脈、督脈、足陽明の会」(明代・李時珍著『奇経八脈考』)であることと関連すると思われる。したがって、脾胃の状況も表すが、主に「胞宮・膀胱」の状況が反映しているとみるべきである。また頤と両頬も任脈との関連でみるべきである。

- i. 写真の女性の場合
- ii. 頤の紫色斑と舌辺の瘀斑の現れた女性の事例
- iii. 妊娠した女性の事例

## II、頤椎損傷の人の陰部の違和感をどう捉えるか？

交通事故で頤椎を損傷してから、異常な性欲亢進が起こった事例をどうとらえたらいいのか？

督脈の経気が頸部で阻滞したことで、下焦に経気が留まった症状とみるので、任督脈の経気の流れが滞りなく行われることが必要とみる。

## III、長強穴と会陰穴の取穴法・主治・刺鍼法

位置：(西晋代・皇甫謐著『鍼灸甲乙経』に基づく。他書もほぼ同じ。)

長強穴——「在脊骶端」

会陰穴——「大便前、小便後、両陰之間」

主治：(東洋学術出版社刊『針灸経穴辞典』に基づく)

長強穴——「下痢、血便、痔疾、脱肛、便秘、腰脊部痛」

会陰穴——「排尿・排便困難、痔疾、月経不順、遺精、癲狂、驚癇、溺水による窒息」

刺針法：(東洋学術出版社刊『針灸経穴辞典』に基づく)

長強穴——「尾骨の前縁にぴったりと針をつけて斜刺で0.8~1.2寸」

会陰穴——「直刺で0.5~1寸」

(刺針経験から体位を考える)

ここ1年、陰部の症状や異常感覚を訴える人に対する治療の機会が多くなってきた。その人たちを通じて、局所穴の取穴の体位と刺針方法について、考える。

i、学校の臨床実習に来た痔疾の患者さんの事例。(今井絹子方式の刺針姿勢について)

ii、Ⅱの事例。(伏臥位の問題点)

iii、痔自体はたいしたことはないのに、座っていたり、車を運転したりしていると、強い異常感覚が起こって、仕事にも就けなくなってしまった事例(西田方式の側臥位について)